

てのひらの記憶

稲葉喜久子 文 東本つね 絵





稲葉 喜久子（いなば きくこ）

東京・中央区人形町（旧・日本橋区芳町）に生まれる。1944年8月末日、集団学童疎開で、埼玉県入間郡毛呂山町の高福寺に入る。1945年3月1日、7ヵ月ぶりに進学のため6年生全員が帰京する。3月9日夜の空襲の数時間前に江東区（旧・本所区）森下町の叔父さんの家を訪ねる。空襲で火の海に囲まれながら家族全員無事。しかし、森下の叔父さんの家では、お手伝いさんと叔父さんが助かっただけで、叔母さんを含め4人が行方不明。
現住所 東久留米市浅間3－9－6

稲葉喜久子 文／東本つね 絵

てのひらの記憶

発行日 1985年3月1日

発行者＝田 辺 徹

印刷所＝光陽印刷 製本所＝昇 栄 社

発行所＝株式会社草土文化

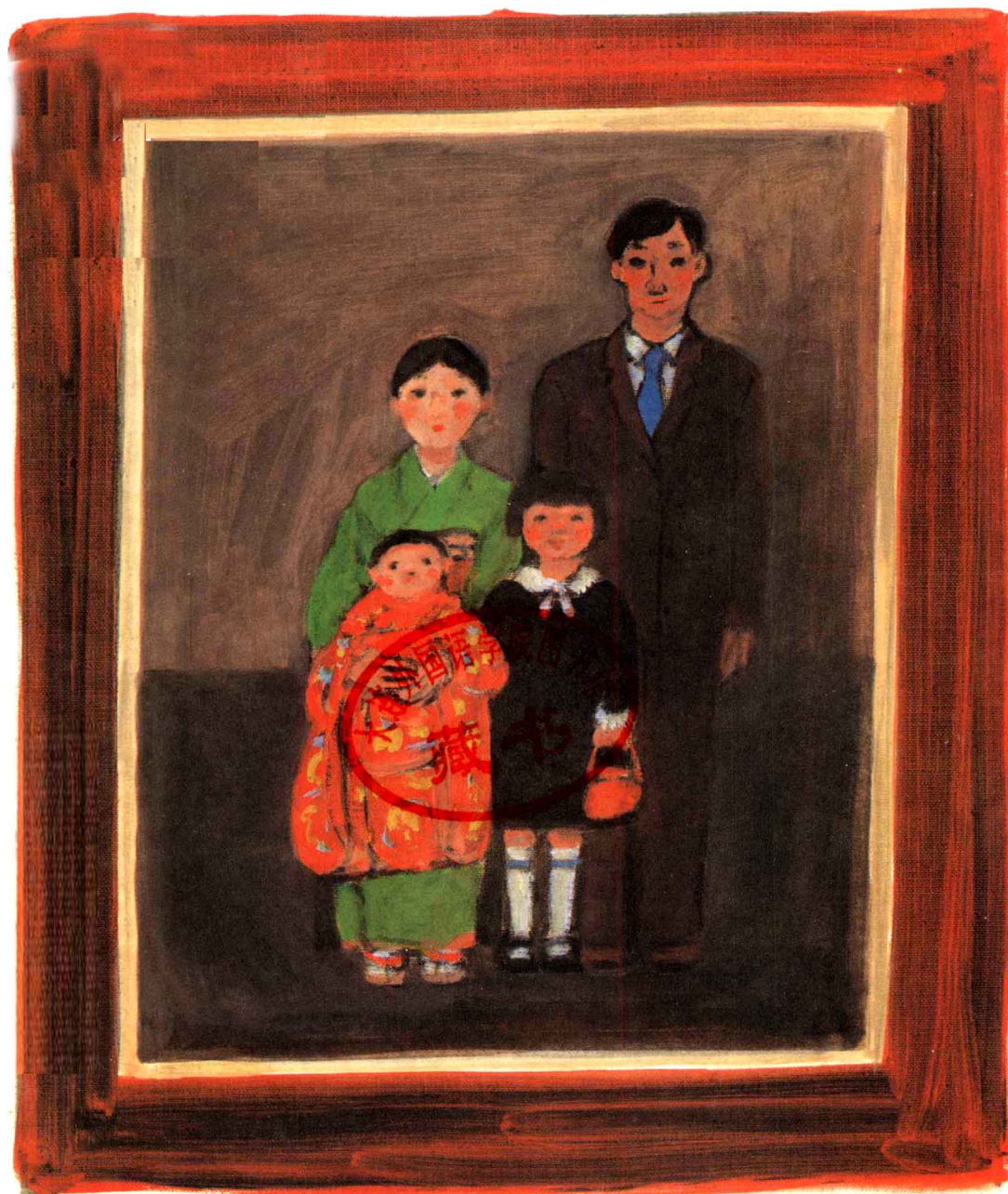
東京都千代田区五番町10－6 〒102

TEL 03-264-0631 振替東京 5-46122

ISBN 4-7945-0207-9 C8793

てのひらの記憶

稲葉喜久子 文 東本つね 絵 草土文化





わたしはいま、一枚の写真をみています。押入れ深くしまわれていて、あまりひらかれることもなくなつた古いアルバム。母から借りたものです。セピア色になつたその一枚の写真には、椅子に腰掛けた母親の膝に、赤子がお宮参りの美しい衣裳を着て抱かれており、その横に黒いビロードのワンピースを着た少女と父親が立ち、いずれもおだやかなほほ笑みを浮かべて写っています。写真の裏書きをみると、

昭和十七年三月

佐智子、宮参りの日に

とあります。この家族は、わたしの叔父と叔母、そしていとこの侑代と佐智子で、その後生まれた勝彦が加わつて、五人家族になりましたが、この母と子は、この写真が写されてから三年後、昭和二十年三月九日夜の東京大空襲で焼死してしまいました。わたしはその日、この叔父さんの家へいき、夕食をご馳走になつて、そのあと「さよなら」をいってわかれたのですが、まさかその「さよなら」が永遠のわかれになろうとは思つてもみませんでした。

そのとき侑代は六歳、四月になれば国民学校（現在の小学校）に入学するはずでした。佐智子は三歳、勝彦はおすわりができるようになっていました。

そしてわたしは国民学校六年生で、太平洋戦争のさなか、集団疎開地から東京に帰つて九日目のできごとでした。

わたしは昭和七年、東京・日本橋区芳町（現在の中央区人形町）に生まれました。わたしの



生まれた前年^{ぜんねん}に満州事変^{まんしゅうじへん}がおこり、日本は戦争の道をつき進みます。
中国侵略^{ちゅうごくしりやく}を開始^{かいし}した日本政府^{せいふ}は、中国がすぐに敗ける^まと考えていましたが、中国側の反撃^{はんげき}が
つよく戦争は長びいていました。中国との戦争をつづけるためにも、日本は石油^{せきゆ}などの資源^{しげん}確
保^ほが必要^{ひつよう}となり、資源のある東南アジア^{とうなんあじあ}の国^{くに}々に（当時は、フランス、イギリスなどの植民地^{しよくみんち}）
に^{たい}対して日本の侵略^{しりやく}が開始されました。

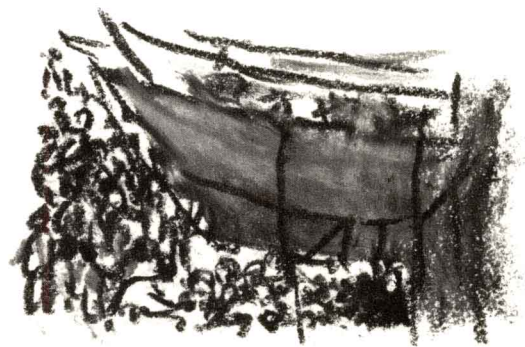


昭和十三年、国家総動員法が成立してからは日本の農業、工業、商業は法律に示される通り「戦争に勝利する」という国家の目的と計画に向かって総動員されることになり、重工業が重視され繊維産業などが軍需産業にかえられるようになり、人手は兵力や軍需工場の労働力として動員されることになりました。このため、わたしがもの心ついたときは、すでにお米は配給制、旅行するにもお米を持っていかないと、旅館は泊めてくれないようになっていました。米にかわってパン、うどん（当時、これらを代用食といった）が主食となり、衣類やマツチも一人あたりの割当があり切符がないと買うことができませんでした。

こうした日常生活の不自由さと物資の不足は、戦争がはじまり戦線が拡大するにつれて、さらに深刻になってゆきました。うどんやパンにかわってじゃがいもやかぼちゃが主食となり、ほとんどの食糧品は隣組を通じて分配され、自由に店で買えないので、高値のヤミ物資にたよるようになりました。

ガスは時間供給、しかもトロ火。電燈はついていましたが「燈火管制」といつて窓に黒い布をひき、電燈には黒い布をおおって燈が外に漏れないようにしていました。服装は、女性はモンペ姿、男性は軍服と同じカーキ色の国民服、国民帽をかぶり、足にゲートルを巻くという服装が決められていました。生徒が胸当のある赤いズボンをはいて学校へいこうものなら、先生からたいへんにしられました。パーマネントは禁止、和服、ワンピースの着用も「ぜいたくは敵だ！」といわれました。

こうしたきびしい生活を、「勝つためののだ。がまんしなくちゃ」と歯を食いしばって耐えていました。



わたしが生まれ育った芳町という街は、江戸時代、明暦の大火まで花街「吉原」があつた盛り場で、戦時中も芸者置屋、料亭があり、それに接して「下駄屋」「提燈屋」「床屋」「染物屋」などが並ぶ職人の街でもありました。となりが人形町です。

江戸時代に人形浄瑠璃の芝居小屋が建ち、人形造り師がいたことから「人形町」の名がついたといわれています。

人形町の大通りは商店街で、南端には安産祈願で名高い「水天宮」。西に日本橋通り、東に隅田川があり、芳町、人形町一帯は、戦争が激しくなる前は小さな街ながら活気のある、しつとりとした街でした。

そこに住む人びとは、毎月五日の水天宮の縁日、春は榎森神社の祭礼、夏は大川（隅田川）の花火、秋は神田明神の祭礼、そして大晦日、寝ずに商う歳市といった行事を一年の季節の節目に置きながら、それぞれが家業に精を出していました。

一年の最大の行事は榎森神社の祭礼。宵宮（前夜祭）から街は神社に参詣する人のそぞろ歩きの足音がして、明ければ朝から五月の街に「おはやし」の音がひびき、三日間商売を女たちにまかせた男たちは、そろいの祭り浴衣に屋号を染めぬいた半纏を着て、酒をひっかけ御輿を担ぐ。学校も早退けになり、子どもたちは、おとなに負けじと白いパンツに小若の半纏をはおり、鼻筋に一本おしろいを塗ってもらうと白足袋の足も軽やかに表に飛び出し、山車を曳き、子ども御輿を担いで町を練り歩く。

「ワッシヨイ、ワッシヨイ」



「ドーン、ドーン、カッカッカ」

御輿を社務所まで担いでくるとおろし、社務所で袋菓子をもろう。お菓子を食べながら町を巡ってもどってきた、おとな御輿の激しい動きに見入るのです。男たちは汗の匂いをふりまきながら、太い両腕を高くあげて御輿をまわす。そのなかに、父や兄をみつけるとなんとなく誇らしいような、また違う人を見るような気がしました。

江戸時代からつづいてきたこの祭礼も、わたしが国民学校四年生のころから戦争のため中止されていました。

ミッドウェー海戦に敗れ、つぎつぎと占領地を奪われていった日本は、アメリカ空軍による本土空襲に直面することになりました。そこで政府は都市住民の疎開を実施することにしました。「住民疎開」とは空襲による被害を少なくするため、都市からいなかへ移住すること。そ

れには、いなかの親類をたよる「縁故疎開」と、いなかのない子どもたちが学校ぐるみで地方に移住する「集団疎開」とがありました。集団疎開の対象は、いまは戦力とはなれないが、将来、確実に日本の戦力となる国民学校三年生から六年生の児童が対象となりました（後に空襲がひどくなると幼稚園児、一、二年生も対象とされた）。

わたしも、三年生の弟とともに集団疎開をすることになりました。

日本橋区の児童の疎開先は埼玉県ときまり、わたしの学校、東華国民学校は、入間郡にある三つのお寺と、一つの旅館に分散して疎開することになったのです。

出発予定は昭和十九年八月末。

その出発予定日が間近に迫ったある日、町内会の人びとが、わたしたち集団疎開

児 童	町村名	学 寮
五年男子、六年松組(男子)	大 家 村	永源寺
四年男女、六年竹組(男子)	毛呂山町	長栄寺
三年男女、五年女子	越 生 町	越生館
六年女子	毛呂山町	高福寺

児のために「お祭り」をしてくれることになりました。それは、「ただでさえ暗い戦時下の生活のなかで、子どもたちが両親とわかれなければならなくなつた。さぞかし心細いことだろう。その子どもたちをすこしでも元気づけてやろうではないか」という、励ましの祭りでした。町内会では特別の許しを役所からもらい、お祭りをおこないました。

祭りの日がきました。

朝食を終えると、わたしは体育着に鉢巻き姿（半纏は禁止されていた）で家を飛び出し、なかよしの時子ちゃんの家へいきました。

「時子ちゃん」

玉石を敷きつめた時子ちゃんの家のお玄関で呼ぶと、のれんをかきわけ時子ちゃんが飛び出してきました。

数年ぶりに日の光を浴びて、子ども御輿がくり出しました。疎開するわたしたちも、家庭のつごうで東京にとどまる子どもたちもいっしょになって御輿を担ぎます。おはやしの音もなく、担ぎ手が兵隊となつて戦地へいつてしまったので、おとな御輿もなくさみしい祭りでしたが、「ワッシヨイ、ワッシヨイ」と、大声を出して担ぎました。

町内をなんども練り歩いているうちにお昼になり、わたしたちは、大鍋が湯気をたてて待っている酒屋の倉庫に群がりました。

弁当屋の晃君のお父さんが手馴れた手つきで井に豆雑炊をよそい、ならんでゐるわたしたちにわたしてくれまう。おじさんは持ち前の大声でいいました。



「みんな、元気でいってこいよ。この東京は、おじさんたちが、きつとB公ビーこうから守ってやるからな」

B公というのは、アメリカの爆撃機B29のことです。すると男の子が、口ぐちにまぜかえしました。

「おじさん。東京の空にデツカイ蚊張かやでも吊ろうっていうのかい」

「そうだよ、おじさん。吊り手はどこに掛けるのさ」

そのことばに、そばにいたお婆さんたちも、わたしたちもいつせいにわらいました。砂漠さばくでオアシスに出あったようなうれしい祭りの一日に、わたしたちは学校のこともすっかり忘れていました。そのころ学校での生活も暗いものになっていたのです。

「日本は神かみの国です。空から雲に乗り、お降りなされた神様の皇孫こうそんがお治めなさる国です。敗けそうになれば、神風かみかぜが吹いて日本は必ず勝ちます。勝ち抜いてアジアの国々とともに豊かに暮くらしましょう」とくりかえし教えられ、「雲で降りるなんて、それ、ほんとうかなあ」などと質問すれば、たちまちビンタ（なぐること）が飛びました。体の弱い子が真ますぐに立ってられないのを「少国民しょうこくみんの自覚じかくがたりないからだ」と先生にいわれ、なぐられ、つき飛ばされるということもありました。戦争がひどくなつてから、やさしかった先生が、すぐ怒るようになっていました。

八月末、いよいよ疎開する日がきました。前の夜、母は弟とわたしをそれぞれに抱いて寝てくれましたが、母といっしょに寝るなどすこしてれくさい気がしましたが、母の匂においに包まれて眠ねむりました。

出発の朝。わたしは起きるとすぐアヒルにエサをやりにいきました。

当時、わたしはアヒルを一羽飼っていたのです。真白な羽と黄色くひらたい口ばし、水かきのある大きな足をもったメスのアヒルで、ガアガア鳴きました。玉子はまだ産みません。よつこ、よつこと歩く姿から「ヨッコ」と名づけました。アヒルを飼うといつても、庭も池もなく、大きな竹籠のなかに入れ、散歩は店の前の往来でさせました。そのうち池に入れてやりたくなって、父に池をつくってもらいました。父は道路の隅の排水溝の脇に、アスファルトに穴をあけ内側をセメントで塗って小さな池をこしらえました。ヨッコを入れると、スポツとはいり浮いています。池から出して、水道の水をシャワーのようにしてかけてやると、ヨッコは白い羽をひろげ水しぶきを散らしながら、バサバサと羽ばたきました。それからわたしはエサをやります。洗面器にフスマと野菜くずを入れ、うえからお汁の残りをかけて、ヨッコの前に置くとヨッコは黄色いひらたい口ばしを洗面器にぶつけながらカタカタ、パクパクにぎやかな音をさせてあつという間にたいらげてしまいました。

そんなある日のこと、学校から帰ったわたしが、いつものようにヨッコに水浴びをさせていると、ひげをはやした巡査が自転車に乗ってむこうからやってきました。

ヨッコにホースの水をジャージャーかけているわたしのそばを、通り過ぎようとした巡査は、あわててブレーキをかけると、片足を地面おろしてしばらくヨッコを見ていました。「かわいいでしょ」とわたしは心の中でじまんし、いっしょうけんめい水をかけていました。

すると、

「けしからんねえ。こんなところでアヒルなんか飼っては。往来の人のじゃまになるではない



か。第一、道路に穴を掘^ほったりして。お父^{とう}さんを呼びなさい、お父^{とう}さんを……」

わたしはびっくりし、大声で、

「お父^{とう}さん。はやくきて」

と呼びました。

いそいで出てきた父は、ひととおり巡査にしかられると、

「すみません。子どもたちがかわいがっているものですから。こんな時代、子どもも遊び道具^{どうぐ}がないもんであてがってあります。見逃^{のが}してくださいよ。かわいいもんです」といっていました。

巡査は、しばらく父とヨツコをみくらべていましたが、自転車に乗るといってしまいました。

「いまに警察^{けいさつ}からなにかいってくるかもしれないな」

と父にいわれ、わたしは心配になりました。

それから二度ほどその巡査はみにきました、



自転車から片足をおろしたまま、籠のなかのヨッコをみて、いつてしまいました。

それきり警察からはなにもいつてきませんでした。

こうして育ててきたヨッコともいよいよおわかれです。出発の朝は、とくにご飯に汁をかけてやりました。

「さよなら、ヨッコ」

と、わかれをつけ、それからわたしは家中をみてまわりました。

絹糸専門の染物屋で、以前なら赤や黄、色とりどりに染めあげられたたくさんの絹糸が、美しくつややかに干されていたのですが、いまは仕事もなく、竹竿が片寄せられていました。

部屋には家族の匂いがあり、母の部屋には髪**かみ**のびんつけ油の香**かお**り、父の簞笥**たンス**には父の匂い、姉の部屋はセーラー服の匂いがしみついていました。